

18. 夜間中途覚醒による不眠症に随伴した夜間頻尿に対する理気剤(抑肝散)の効果

長崎大学病院 泌尿器科・腎移植外科

○松尾 朋博、大庭 康司郎、宮田 康好、酒井 英樹

【はじめに】排尿障害は蓄尿症状、排出症状、排尿後症状に分けられるが、蓄尿症状のひとつである夜間頻尿は男女ともに有症状者が多く、QOL (Quality of Life) へ多大なる影響を及ぼしていることがわかっている。夜間頻尿の原因はさまざまであるが、夜間中途覚醒による不眠症に随伴した夜間頻尿を訴える患者も多い。そのような場合、西洋薬の睡眠薬などで対処することも多いが、依存性やその他の副作用により特に高齢者では使用しづらい場合もある。

一方、漢方薬である抑肝散は入眠障害、熟眠障害のいずれにも効果的で、かつ安全性が高い薬剤とされる。今回われわれは、夜間中途覚醒による不眠症に随伴した夜間頻尿に対し抑肝散を投与し、投与前後での自覚症状の変化を調査したので報告する。

【対象と方法】当院で経過観察中の患者で、夜間中途覚醒による夜間頻尿と診断された患者のうち同意を得たものを対象とした。

ツムラ抑肝散®(TJ-54)を1回2.5g、1日3回、12週間連日で内服投与した。

抑肝散投与前と投与12週後で、過活動膀胱症状スコア(OABSS)、入眠後の第1覚醒までの時間(HUS)、ピッツバーグ睡眠質問票(PSQI)を用い評価検討した。P<0.05をもって有意差ありと判断した。

試験参加時に内服していた排尿機能改善薬、睡眠薬は調査期間中には変更しなかった。

【結果】同意のうえ、本臨床研究に参加した患者は24名(うち男性12名)、平均年齢は74.4±9.8歳であった。3名で内服しづらいとの訴えがあったが、有害事象はなく全員本臨床研究を完遂できた。OABSSの合計スコアは投与前4.6±1.7から投与後2.8±1.9へ改善(P<0.001)、夜間頻尿(OABSS Q2)は2.6±0.6から1.8±0.9へ改善した(P<0.001)。実際の夜間排尿回数も3.7±2.2回から2.2±1.8回へ減少した(P<0.001)。HUSは2.4±0.6時間から3.3±1.2時間へ延長し(P=0.002)、PSQIも7.6±3.1から5.7±1.7へ改善した(P<0.001)。

【考察】抑肝散は中途覚醒に随伴した夜間頻尿の患者にも効果的であることが確認された。今回比較的年齢層が高い対象群ではあったが、安全性も問題なく睡眠の質を改善することができたため、抑肝散は同様の症状を有する患者に対して有効な薬剤の1つになりうると考えられる。